

ったようにも考えられる。描画の表現は、神だけのもの、天上の神、動物達と遊ぶ神などで、日本では、神観、雲上の神、普通人、仏観では、仏壇、偶像、普通人の順になっている。

「神はどこにいるか」の問と考え合せてみると、天国十四名、雲の上六名の順で、日本の神観の場合も同傾向がみられた。「神をみたことがあるか」の問に対し、米国児では、みないが六八%、五才以後にはみたと答えたものはない。日本幼児の神観でも同傾向で、仏観ではこれがほぼ同数みられた。

更に、神の使命について「神は何をする人か」の問には、創造主、救世主について答え宗教的背景がよく現われている。わが国の神観では、創る人が多く、仏観では漠然としておりまた、死者と関連していたりして、考えの相違がみられる。「神はどんな力があるか」には、非常に大きい力、「誰が神になるのか」には、イエス様、わからない、誰もならない、マリア様の順で、日本での死者と関連しているものから比べると、唯一の神という考えがうかがわれる。「病気を直すのは誰か」では神様、医者様の順で、日本の、医者、神様の順からみると多少のちがいをみせている。「神と人とは同じか、ちがうか」では、「ちがう」と年令順にはっきりした解答をしている。

結語 以上少数資料からではあるが、対象となった、米国児と日本児の神仏観念のちがいは、米国児も、三、四才時代には、神と人間との観念が混沌としているが、五才以上になると神を至上至善のものとして幼児なりの世界観ができあがっていることがわかる。

これに対して日本では、宗教感情が日常生活の中から具体的にとらえられており、仏と死者との混同がみられるなど、その内容にもとぼしい。

米国と日本の幼児の宗教観念は、自然発生的な芽生えにおいて

は、さして差はみせていないが、キリスト教の精神を幼児時代から日曜学校や家庭の中で教育されている米国の場合と、精神的な宗教性のない社会の中に育っていく日本の幼児の場合とは、道徳性や、その内容においても異っていることがわかる。

これからの宗教教育そればかりではなく、広い意味での人間教育に保育の場としても考えなくてはならないものがあるように思う。

(大会抄録138—141頁)

幼児後期の道徳意識の分析

(第二報 分別について)

愛育研究所 村山 貞雄

市村 尚久

(一)

本研究で取り扱ってきた《道徳意識》という概念には、単純な善悪についての知識から複雑な生活場面で想起される情意的な対処傾向までが、その内容として含まれている。前者は、ピアジェらにより道徳的判断とよくいわれているものである。後者を研究者は、道徳的分別とよぶことにした。この道徳的分別は、過去の経験を通して形成され、次に予定される道徳的行為を規定する要因と理解するものである。

今回の研究報告では、幼児後期の道徳的分別の発達の姿を分析的に検討した結果の一部分をとりあげたに過ぎない。

調査は質問紙(幼児用道徳検査・日本保育学会第十回大会発表要旨三)

六頁参照)で、全国二五の幼稚園・保育所に依頼して行なわれた。

「分別」に関しては、十二種の質問事項(仮定場面に對する幼児の応答をみるための)が考案・限定され、四歳〇か月から六歳十一か月までの総計一〇九一名が答えたものを分析検討した。そのうち、四種の質問を選んで、応答内容・年齢段階・男女別に、それぞれ頻度によつて分類したものが、発表抄録一四三頁から一四四頁にわたる四つの表である。

これらの分析表から、道德的分別に關する自然發達上の傾向を検討し、「マンの検定」による傾向分析(幼児後期の保育内容設定のための何らかの示唆をくみとりたい、と意図するものである。

(二) 『もし、目のみえない人が、川に落ちかけているのを見たら、あなたはどうしますか』という質問に對する幼児の応答内容類別の一つに、『A.独力で援助する』というカテゴリーが設けられた。(研究発表抄録集一四三頁第一表参照)

この種の分別は、男女差がみられなくなる五歳前半になると、一〇〇人中過半数以上の幼児が、自然發達としてもち合わせてくるといえよう。このAは、統計上では上昇傾向が五%の危険率ではみられなかったが、『B.注意する』と『C.他の援助を求める』を加えると、%の危険率内で五歳後半(九〇%強)に向かつて比較的高率で急上昇傾向がみられる。

BとCの分別は、Aに比較して順を追つて低次のものと考えるが、これら三種の分別は、いずれも親切という共通の心情に支えられているものであるとみることができよう。このことは、『親切』は好ましいという道德的性情が、具体的な生活場面では種々の分別様式をとる、ということを物語っている。

抄録の第Ⅱ表は、金錢を捨得した場合の分別をみるもので、幼児の所有の觀念の發達をとらえるに一つの恰好な手がかりになるものである。本表から読みとつたものは、次のようである。

(1) 五歳前半台から、概して『B.家族にとどける』よりも『D.巡査にとどける』という傾向が優位になってくる。

(2) Bは、四歳後半以後は常に女児が男児に比較して高率であるに反して、Dではちょうど逆の比率を示す。「お巡りさん」は、女児の方が男児より心理的に縁遠いようである。

(3) 六歳後半になると、五〇%強の比率で、Dという分別が發達してきているとみるとき、現実にはBの家族にとどける方が手近で好都合であろうが、できればDのお巡りさんにとどける方がより好ましい、という分別を就学前にもたせるよう指導してよいだろう。

(4) 『F.自分のものにする』は、非常に低率で、しかも下降傾向はみられるが、少なくとも金錢に關する所有の觀念は、このような表にあらわれた少数のためにも、五歳に入ると、しっかりと身につけさせるよう指導すべきであると考えられる。Fという分別しかもたない幼児の指導に際しては、彼らが不道德な状態にあるか、無道德の故にそうであるかによつて、指導方法は自ら違つてくるように考えられる。不道德な心理状態にあるならば、相当厳しくつけてよいと考える。

次の図表は、抄録中第Ⅲ表から作られたものである。ここでの質問から、個人の責任感・正義感・正直さ・眞の勇氣といった情意の程度の差に應じて、図表のような諸分別の傾向がみられるものである。本図の『E.その他』は、「どうしてよいかわからない」といった内容のもので、『A.自分も謝罪する』とよい対照をなしている。こ

保育効果の研究

観察による研究 (その二)

愛育研究所 村山貞雄

西嶋淑子

この研究は、前年度の大会で発表した観察による保育効果の研究に続くものである。すなわち一斉保育場面、与える場面、誘導場面の三つの保育場面を観察して教師の保育態度の傾向とその効果を調べようとするものであるが、今回は、観察者が級全体の子どもからうけた印象によって評価した級の性格傾向と教師の保育態度との間にある関係を見出そうとした。

調査は都内にある幼稚園と保育園の六園で行なった。観察場面数などについては抄録集第一表に示してある。

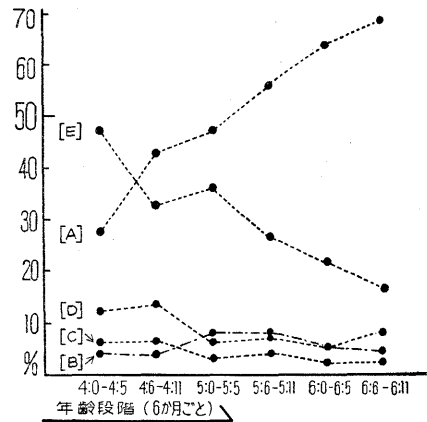
教師の保育態度は、十三項目に分類し、級全体の性格は、自主性・協調性・興味関心・発表力・明朗性・安定感・清潔感について五段階評価を行なった。これを年少組と年長組に分けて次の三つの面から検討した。(抄録集第二、三表参照)

(1) 各性格ごとにその評価得点の高い級と低い級とは、その教師が保育中子どもに働きかける度合が違つかどうか。

これは、教師の保育態度項目の総頻数を性格の評価得点の高い級と低い級に分けて求め、その頻数の割合を観察場面数の割合と比較することによってみた。なおこの検定には χ^2 検定を使用した。この結果は抄録集第四表に示したが、どの性格項目も、得点の高低によって教師の子どもへの働きかけの度合がちがうのは一斉保育場面であり、年少組と年長組では特に年長組にそれがあきらかであった。

お友だちと一緒に、あなたもわるいことをして、お友だちだけじゃなかったら、あなたは どうしますか

- [A] 自分も謝罪する(上昇傾向 1%危険率内有り)
- [B] 友だちを気のどくに思う(下降傾向 5%危険率内無し)
- [C] 傍観している(下降傾向 1%危険率内有り)
- [D] 自分だけその場から逃げる(下降傾向 5%危険率内無し)
- [E] その他(下降傾向 1%危険率内有り)



このことから、四歳前半台までは、この種の質問場面に対応できる道徳意識は未だ十分に形成されていないのが、自然の姿と言えよう。

抄録第IV表からは、遊び相手の過失に対処する分別がみられる。《A無条件で許す》は、四歳後半からは男女差は殆んどなく、上昇傾向を1%の危険率で示している。《D謝罪を要求する》という分別は、男児の方が女兒に比較して常に高率である。七歳台になるとこの傾向は、自然に消滅すると推定される。《E弁償させる》・

《F許さない》は、共に5%の危険率では下降傾向はみられず、しかも五歳・六歳台でも10%近くの比率を示している点は、興味のあるところである。この点から、過失の意味の理解、それに対する寛大な分別の形成は、幼児自身のより程度の高い精神発達に待たねばならないと考えるが、日常生活を通して、その場面と年齢に応じてアドバイスの可能な分野とみられよう。

(大会抄録141-144頁)